

# 友林蘇岐

(二)



## 學術

### 一樹一木 (其十二)

山櫻 小松吉次郎

四月は花の季節なり百花爛漫の候なりされば老幼の別なく男女の嫌ひなく貴きも賤しきも皆齋しく遊び花に浮かれ意氣揚々たり此時に於ては知己不識も兄弟たり悲哀は轉して歡樂となり上下億兆互に融和す夫れ花の徳豈大ならずや、而して其爛漫たる百花中最も愛玩せらるるものは櫻なり春くれば櫻あり櫻なくば春と思はず即ち世人は櫻によりて春を知り花恰も唇を見ざるが如く世の中に絶えて櫻のなかりせばの句はよく此心を詠みたりと云つべし、されば櫻は春の王者として貴ばれ櫻よりまさる花なき花と賞せられ歌に詩に其美をたゞへて古今變りなし、かく其美を發揮する櫻も其種類甚だ多く且つ變種に至りては枚擧に遑あらず即ち樹幹の形狀枝葉の大小花辨の片辨重辨色の紅白黃桃等種々あれども我國古有にして九州より樺太まで分布せる純潔にして神聖

なる山櫻を以て最美にして國華として他國に誇るべき名花となす  
山櫻の葉は楕圓重鋸齒にして花は葉に先つて開き純白にして香氣ありされて野生の山櫻も細に見るときは多くの變化を有す若葉の眞赤なるもの、黄色を帯びたるもの、綠色のものあり花にも純白、薄桃色あり或は花の密生すると疎につくとあり辨のきれ込の深淺花形の平かと壺の深きとあり或は香氣の馥郁たると否らざるとありて其性質氣の形狀は千差万別なり之れ山櫻は自ら頗る變化に富みて其花性を種々にし見る人をして飽さぬ特性を有するものゝ如し、又山櫻に似て彼岸櫻あり春分彼岸の頃開花す花は小さく葉柄萼筒に毛あれば前者と分つべし又日光地方に「チヨウウジ」櫻あり葉は倒卵形にして長く先端尖りて両面に密毛あれば全く異れり、凡て櫻の材は木理緻密にして伸縮も少ければ器具材印材板材に用ゐられ其皮の良質なるは煙草入山刀鞘に多く使用せらる或は編みて雜囊を製す山間の農夫樵夫最も便として使用せり而して至る所に生長せる櫻樹の大木に至りては關西地方に少くし

て關東より東北にかけて益々大木ありと吉野の櫻は小金井のうれに及ばず仙臺より以北には更に大木ありと聞くされば櫻は稍寒冷の地方に最もよく生育をなす樹種ならん終りに木曾の櫻を見るに老木として名木として數へらるるものは阿彌陀堂の櫻、興禪寺の時雨櫻、願行寺の枝垂櫻なり又數十株團生せるは關山公園とす四月廿日頃は毎年花盛にして實にふめばたしふまでは行かん方もなしの氣苦勞する人もあれば見てのみかいざいへづこに山櫻と大枝を手折る氣樂者も少からず故に余は常に夢の中にも花を散りぬる満山櫻花の眺めよりも深山木の其梢とも見えざりし櫻は花にあらはれにけり梢一本櫻は前の患なく何處となくゆかしく目出度思ふものなり深緑の杉檜の中に遅れ咲きに咲き亂れたる山櫻は如何ばかり美なるや如何に多く人目を引きつべきか此類の櫻木會路に屢々見る所にして春來り關山の花散る時分に思ひ出すものは城山の中腹に隠れたる山櫻一本なり五月十日頃にくれて咲くを學窓より見て限りなく我心を慰む

### ○岐蘇林友 目次

- 學術 一樹一本……山櫻
- 拔草 竹頭開花の原因
- 文苑 木曾俊木
- 通信 各地造材及材積計算法
- 雜報 國語と外國語
- 通信 卒業生諸君に
- 通信 春の心 黃昏、音
- 通信 佐度冬勝歌
- 通信 種ヶ島便り
- 通信 福島通信
- 通信 富十四歳より
- 通信 學校便り
- 通信 四十四年度校友 費收支

定價三錢

明治四十五年四月二十三日印刷  
明治四十五年四月二十五日發行  
編纂發行人 安井正夫

長野縣松本市木町百八拾四番地  
印刷者 兔澤忠雄  
全縣全 市全 番地  
印刷所 交文社  
發行所 蘆澤書店  
長野縣西筑摩郡編鴨町二八九番地



拔萃

竹類開花の原因に就て

其四 (山林公報より)

(八) 竹類の週期的開花は竹類各種固有の性質に因る。竹林開花の原因は之を有らゆる外界の刺激に求めて得ざる事上に述べたるが如し。即ち竹の開花の週期的且つ普遍的なること及び竹種によりて週期の年数を異にせること等の二條件を満足せしめん爲には孰れの方面より其開花の原因を説かんとするも外界の誘引に基くものとはなし難し故に余は之を竹の内部に潜る固有性に因るものとなすの至當なるを認むるもの也。竹の生育状態を見るに其繁殖は常に無性的にして有性的の場合極めて少し殊に苦竹、淡竹、孟宗竹は然りとす又開花後全部結實の観ある竹と雖も多くは穀中種子なきを常とせり之れ竹類は地下莖によりて繁殖し有性生殖の必要なきものにして淡竹、苦竹、孟宗竹を始めとし各地の栽培竹は古來幾千年間有性生殖を營ひことなくして繁殖し來りたるもの也今一個の樹木は之れを一個体と見做す見地よりするときは種子より發芽したる新植物も、地下莖により分離したる新芽も、狹義に於ては一個の植物の一部分と見做すを得べし故に竹類の地下莖にて繁殖したるものは或意味に於て一個体の一部たりされば世界各地に栽培せらるる竹類も亦皆一植物体の枝梢の伸ひたるものに外ならず凡る植物が有性生殖に依りて種子を作り嫩植物を生長する間には系統史を簡單に繰返して

茲に個體發育を遂ぐるものなれば所謂成熟期に達するまでには一定の年月を要す然れども無性生殖により繁殖したるものは其植物の一枚一梢と雖も既に個體發育を遂げたものなれば外界の状態適當ならば直に生殖器官を生すべき性あり故に竹の如く無性生殖を營めるものを人工にて分株繁殖せしむる竹類は之れを種子より萌芽したる植物体の年令と同一視すべからず。然れば同種の竹は之れを世界に跨れる一大個体と見るときは凡て皆同一の年令を有するものと考えざるを得ざるを以て苦竹、淡竹等が世界を通じて同一の時期に生殖器官の發生を見るものなり故に竹の開花は數十年或は數百年の年令を隔てて發するは竹の性質と見做して不可なきこととす。 (九) 九凶年と竹の開花との關係 「竹實のるは竹瘦なり凶年の兆なり」とは古書に見る所なり然れども實際は一致せず即ち苦竹、淡竹の開花は週期的なるに凶年に其事なきを以て明かなり之れ世俗の迷信に基くものにして偶々丙午の年の頃凶作ありて以來かく云ひ傳へたることなるべし山中に自生する「みやこ」す「だけ」は屢結實するものなれども平素之れを顧るものなきに偶凶年のとき餓民が山中に竹實の熟せるを知りて之れを取り遂に後世に飢饉年と竹實と關係あるが如く傳へしものなり。又竹が開花結實するときは野鼠蕃殖し竹實を喰ひ盡して附近の田畑を犯すと印度に於ても我國に於ても一二の實例あり然れば多少竹の開花と農作物との間に關係あるもの如ければ凶年に限り竹の開花を見るものにはあらず且つ竹の開花が農作物一般の凶作を惹起すものと見做すべからず結局竹類の開花結實と凶年とは何等の關係あるに

木曾の伐木

あらざるものとす (十) 孟宗竹に未だ普遍的開花の實例なきは何故か 我國三大竹栽培竹の一たる孟宗竹は未だ其一般的開花に關する記録なし故に竹類開花の原因を營養分の缺乏に因れりとす論者は常に孟宗竹を例とせり即ち孟宗竹は食用竹を得ん爲に施肥入手十分なればなり然れども長年開花肥せざる孟宗竹林も亦開花する事なきなり、而して孟宗竹が我國に渡來して未だ百七十五年を経過したるのみなれば今日まで一様に開花せし事を知らざるは恠むべからず之れ苦竹の開花が凡る百二十年を隔てて發するものなれば孟宗竹は或は更に長年月を隔てて發するものならん (十一) 結論 我國栽培竹中最も古き歴史を有し晋く世人に知らるるものは苦竹と淡竹となりとす今其開花の年令を過去千百年來の記録によるに明かに凡る六十年又は百二十年の間隔をたきて週期的に開花せることを知り又其開花世界各地に廣く一致せることは事實なり其原因を説明する爲に前數節に述べたる如く日光温度天候土壤中の養分等は未だ開花の原因と認め難く畢竟之れを外界の状態に求むること不適當なるを知れり即ち竹自身固有の性質によるものと爲したり。故に竹林の開花を豫防せん爲に施肥灌水等其効なかるべく若し肥料を施さんには専ら營養器官の發育を促し生殖器官の發育を妨ぐる特殊の肥料を以てすべし (完)

伐木の豫業 S N 生 伐木事業を起さんさせば俗に「びを見る

より谷を見よ」と云ふ第一に事業區下流の谷を見るの必要あり、後原木調査をなし其材積に應じて人夫雇付をなす、例へば四月起業するものなれば一月乃至二月中に雇付を要す該雇付に當ては豫め下調を爲し置き後雇付係員各村を巡回なし袖夫、運材夫、小袖夫、各熟練者につき組頭にするを約し尙ほ請書を徴収するに付本人は勿論保証人身元を篤と取調の上約束を履行すと同時に左の金員前金として渡すものとす

- 袖夫一組十二人詰 金六十圓
運材夫一組三十人詰 金百五十圓
小袖夫一組二十人詰 金八十圓

二、事業所の組織 事業所は會所と稱し掛員總頭代人員所人及炊夫持子茶坊を以て組織す 掛員は伐木造材及運材の指揮監督並に糧食金錢の出納器具器械等の受持其他百般の事を擔當處分す 總頭には袖總頭、日雇總頭の二種あり共に掛員の指揮を受けて代人を統御し造材或は運材に關する専ら外部の業務を統督す次に總頭格を置きて總頭不在の折に當て之が代理をなす 代人には袖代人袖代人格の二種あり共に掛員及總頭の指揮に従ひ袖夫及運材夫を率ひて各々の事務を分擔す 喜所人は物品の出納の爲め掛員を補佐し炊夫以下の指運取締をなす 炊夫は喜所人を補佐して炊事割烹に従事す、持子は都會と事業所との交通連絡を司り文書の遞送要品の調達運搬等に從事す

三、代採區の割付 伐木造材に當りて角材ある時は四月上旬

伐木の方法に頭巾切(合せ切り)と臺切りとの二種を施行す 1、頭巾切り 立木を伐採するに當りてや其傷損折せざるは勿論他の立木を毀損せざる爲め先づ樹幹の状態周囲の状況に鑑み伐採すべき方位を定む其方位は立木の上部へ伐倒するは第一良とす、乍併技條は多く下部に叢生するを以て上部へ倒し難きにより横側へ倒すを普通とす、而して其方向より斧を加へ樹幹の半に至る受口を入る更に斧對の方向より追口と稱し切り込み受口に達せしむ然る時は樹幹は受口の方角に倒るものなり 2、臺切り 特に大なる樹幹は三方より穴を穿ち鼎狀に三脚を残存し其切り倒すべき方向にある穴を受口と云ひ他の穴を追口と云ふ而して三脚を追口と名付け此追口を除くに截り放ちて目的の方向に伐倒すにあり 五、造成法 造材に圓材及角材に二種あり 1、圓材 圓材は伐り口より規定の寸法に本すきて

圓材のみなれば五月七旬即ち八十八夜に至れば樹木の剝皮に適當の時期なり而して着手の時期に先立ち山割と稱して樹種大小、立木の疎密作業の難易等を斟酌して全伐採區域を適當に分割し各組の分擔區域を定む、山割の區域たる多少の損得は免れざるを以て抽籤法に依て定むるを例とす己に袖組の伐採區域定まれば袖夫、運材夫、小袖夫の立會を以て之れを細分して各袖夫の受持範圍を定む之を割付と云ふ

長ざの側定を爲し切斷す而して樹皮を剝が取りて兩端を穹狀に削る之れを頭巾と稱す、斯く造材するは運材に際し滑走を容易ならしめ且つ毀損を避くるの利あり 2、角材 角材は矢張り規定の長さに切斷したる後樹幹の屈曲を検し墨打ちに依て正角に造材(頭巾は圓材に等し) 以上圓材、角材共に良材の三間以上ものには一端若しくは兩端に目途穴と名付けて一個或は二個の穴を穿ちて之れに麻網を結束し釣り卸すの用に供す

Table with columns for material types (e.g., 呼長, 正尺, 呼長, 正尺) and their corresponding dimensions (e.g., 三尺五寸, 一四間材, 七尺, 正尺).



右表中の寸法は總て末口直徑を以て記載せるものごとす

三間	尺三寸	尺三寸
半三間	尺三寸	尺三寸
自四尺三寸	尺三寸	尺三寸
六間	尺三寸	尺三寸
六間	尺三寸	尺三寸
以上	尺三寸	尺三寸

八、檢尺法  
山割區域内の伐木運材の終りたる時は事業掛員監督の下に袖總頭代人袖夫立會上其造材を規定の寸法並に造材の善惡を檢査す之を名けて山元檢尺と云ふ

九、伐木造材に使用する器具の種類名  
伐木造材に使用する斧、鉋、環、鋸、袖網、楔、墨繩、引懸、尺等とす(器具の使用法は説明を畧す)

十、附記以上の伐木及造材事業は完成せるを以て掛員より總頭組頭の手を経て出錢高に應じ賃金を支拂ふ其賃金高は種々の高底あるを以て畧す

各地造材及材積計算法(續)

和歌山市場 紀の川口位し吉野木材の關門にて三百年前より木材の取引をなす

(一) 造材法  
(イ) 九太材 總て七尺を以て一間とす二間、二間半、三間等も此割合なり此外に目斗穴兩方にて一尺長く造材す故に一間物の長さ八尺ありて目斗穴を除きて正味七尺あり

(ロ) 角材 長さの標準は九太材を同じ押角と稱するものは多少圓味を附したるものにして其圓味の程度は尺角に對する一方二寸までのものは普通押角とす

(ハ) 板類 厚さにより名稱を異にす  
四分板 正味 三分三厘

六分板 同 五分  
八分板 同 七分  
一寸板 同 九分

(ニ) 貫類 長は二間(十三尺)にして幅は小貫一寸三分、中貫三寸大貫三寸六分に於て厚さは小貫三分五厘中貫五分、大貫十分

(ホ) 檜丸類 吉野産は上内希上赤希中赤希下内希下赤希クロ等の名稱あり厚さ五分五厘内外幅三寸乃至五寸長さ一尺八寸とす三駄丸又四駄丸を一束とす三駄丸の延尺三十六尺にして四駄丸は四十八尺なり

(二) 材積計算法  
木材は才數板類は坪數による

(イ) 一才は一寸角長さ二間

(ロ) 九太材は徑を自乘し且七割九分を乗す但長さ四間未満のものは末口にて長四間以上のものは中央にて尺取す角材は中央の幅厚により算出す

(ハ) 九太材の長さは半間毎に計算し半間に充たざる端數は切捨つ

(ニ) 九太の徑は五分毎に角材の幅厚は一才毎に計算し端數は切捨つ

(ホ) 板坪數は縱横六尺五寸を以て一坪とす

新宮市場 北山川十津川兩流域の木材は必ず此市場に集る其輸出先は主として東京なれど建築材は近年臺灣に輸出す

(二) 造材材種  
杉は角材九太材板類樽丸酒樽辨甲を主とし檜は九太材角材 樅は角材板、樺は角材

(一) 呼寸の正寸と比較  
造材する時兩端に目斗穴を穿つを以て其長さ兩方にて一尺あり  
呼寸 正寸 呼寸 正寸

一間は 七尺 一上は 十一尺  
二間は 十四尺 二間半は 十八尺  
三間は 二十一尺 以上之に準ず

(三) 北山郷十津川郷三重縣の造材及材積計算

(イ) 北山郷  
一、九太材は七尺を一間とし等を用ふるものは五尺を一尋とす  
二、酒樽は長六尺五寸  
三、板類は長六尺五寸  
四、樽丸は長一尺八寸  
五、底丸は長一尺五寸  
六、蓋丸は長一尺八寸  
七、九太材は末口直徑を自乘し角材は元口

(ロ) 十津川郷  
一、杉檜黒木角材及九太材は八尺を以て一間とし一丈一尺を以て一丈とし一丈五尺を以て二間とす其他半間を増す毎に三尺を加ふ  
二、板類長六尺三寸以上六尺五寸以下幅六尺五寸を以て一間とす  
三、樽丸長一尺八寸三駄丸一尺幅三丈三尺四寸但山間は幅三丈六尺を以て一丈とす  
四、全長四駄丸一尺幅四丈三尺二寸  
五、蓋長全白角一尺幅一丈九尺二寸他山間は幅二丈を以て一間とす  
六、身底長一尺五寸一尺九寸幅一丈五尺  
七、材積算出法は九太材は末口直徑縱横(寸留)を相乘し角材は本木口目加内三尺の所の寸尺に依る

(ハ) 三重縣材  
一、尺度は曲尺を用ひ一寸角十二尺を一寸とす  
二、九太材角材は二間物以上は三尺まで二間物未満は二尺まで其延尺を扣除することを得

文苑

國語と外國語

關海波

三、板類は六尺四方を一坪とし其縱横共五寸迄其延尺を扣除することを得

四、九太は徑(兩端徑の平均)を相乘し得たる數に七九を乘す

五、九太角材は一才未満を切捨て板材は一合未満を切捨つ

六、屋根板は五十間を一把とし二把を一相とし中央及兩端を縛す

指を屈し過去を思はば五十有年前の其の昔我が國は強國主義に閉ざされて異國の風を受くる事なかりしなり其が爲めか現今盛に攻撃する吾等青年の希望は妻にして大ならず又吾人の抱負は偉ならずして狭なり且つ彼意沮喪も進取的精神なく侵略的氣概なく其の一生を俗吏に送りて簿書錢穀の奴隷と爲るは實に口惜きことなり之れ一つに強國主義者の精神未だに心を去らざるがならん

若し此の主義を吾人の念頭より去らしめて進取的精神を培養し侵略的氣概を偉ならしめんとせんには何を要となすべきか、之れだ、他國人に接し其の長を得るにあり今や彼の主義薄らぎて我が國の一たび開港を許すや、泰西の文物屢々乎として國內に進入し來り其勢恰も大水の罅隙より侵入するが如し、而して其之が媒介たる者を外國語となす、今や外交の益々多端なるに候に亦愈々其我國人之が必要を感ずる者多きに至れり中就英語の如きは勢猶も大水の汎濫するに似たり

嗚呼他國語の我國人に使用せらるゝ如此盛

卒業生諸君に

狂夫生

大なり、然り而して其の結果は果して我國に如何なる影響を及ぼすか、吾人は轉た憂懼の感なき能はず如何となれば若し外國語にして益々隆盛に赴かんか、優美なる我國語は益々衰微を來たさん、然らば我が國民は其の苦心果して幾何や、況や事茲に至らんか之れ即ち我國の威を殺ぎ彼等の威を盛んならしむるものなるをや、吾人の憂ふる所實に茲に存す

請ふ血あり涙ある諸士よ外國語を學ばんと欲せば則ち學べ、雖然優粹精美の我大日本帝國の語をして煙滅せしむるなく更に進んで室内十百の人数をして盡く我神州語を使用せしめ以て外交に必要な語とせしむるに至らんことを

黄昏

鬼蘇の人

窓を開けた、瑠璃色にすみ渡つてゐた空もたうがれの暮に鎖されんとして居る岸行寺の晚鐘、餘韻爛々響き渡る彼方よりふるさとの音づれを齎しよかと思はれる灰色の雲が後より後よりとつやく、彼方の小丸山此方の城山も何となくうすうすんで來た。木曾乙女の唄つたのであらうたらがれの寂寞を破つて、木曾節が裏の山道より耳朶を打つた見るくうち先づ雲は狭き天地をどさしてしまつてしまつた清水町の電燈もますます輝いてきた障子をしめて机もたれるとなんぞとくたがれの寂寞を感せずには居られなかつた

春の心

小崎生

駘蕩たる春風、霏々として降る春雨、自ら春の心あり、しかも櫻桃の爛熳たる、揚柳の薄煙の如き、皆春の風情を備へたり、落花流水、有情にして日月の照る處、九十の



友林蘇岐

風光長閑なり、天意茫々測るべからず、人生の功名心、あらゆる青年の活氣更に春の心なる哉

音 鬼蘇の人  
カチー、はてなんだらう今の音は障子をあげた何の音もない、音せし方を眺むれば風に床しい山茶花の香のみ障子をどざして又先の寫物さし出した何の音もない、心のまよいか、耳の聴きか……カチ……又した、しばらく音せし方を見た。耳をすまして……なんの音もない、エ、又と一生懸命先のつづきした半頁終るまで何の音もない、やつぱり心のせいか……後は何の音もしなかつた、はてするど先の音はなんであらう、果して心のせい

佐渡名勝歌

越 野 生  
西比利亞風吹荒ぶ 日本海に船出して 眼差せば近し佐渡ヶ島 怒濤激浪打碎き  
兩津の海を分け入れば 北海一の夷港 鷗飛ぶなり帆の湖 渡る棧橋心地よく  
潮海を隔つ突堤にて 緑もふかき時雨松 木崎の宮は秋津にて 漁火の眺めは兩津橋  
(中央線)  
福浦に注ぐ長江川 雲井に仰ぐ金嶺の 麓は熱串彦の神 高さは海拔四千尺  
湖彦と別るゝ寶翠坂 吉井城趾や剛安寺 承久帝の古蹟あり 行けば程なく尾花崎  
大和田薬師ふし拜み 金澤村に記念堂

詣で尙も進みなば 右に日蓮御井戸あり めぐれば西蓮正法寺 荒貴の宮居打過ぎ 黒木の御所に頼づけば 昔のまよ目みめめ

國の寶の觀世音 市野澤なる御松跡 法華の靈場一の谷 二宮の社に詣てなん 春は里宮眞光寺 石田の里に水清し 獅子ヶ城頭いや高く 神の鎮座の中原や 長福妙經兩伽藍 山田は義民の墓處 諏訪の神ます河原田 其名もゆかし眞野海 白砂青松打つづく 澤根平里の眞机片帆 いたや貝探る貝立や 銀堀りし鶴子山 紅葉ヶ丘に杖とめて 望めば近し相川府 國の都の賑はしく 守りの神は山の神 夏は涼しき辨財天 遊べよ岩の千疊敷 蝶螺取る子の面白や 怒濤激する鬼ヶ城 辨慶挟みの奇岩あり 善如鳥の宮の總鎮守 鹿伏の墳は小倉卿 南に廣き春日崎 一望千里の臺場あと (二見線)  
白山城趾訪れて 二見ヶ浦の港町 龜崎丘の磯松に 寄せ來る波のいと清く 昔語りの偲ばるゝ 見不見池の月の影 梅の香は今も猶 餘蘆を送るゆかしさよ 不啼の里の子規 雪の高濱眼もはるに 八幡の森の氏神や 越の松原限りなく

尻屋の松の跡訪ひて 本州一の大河にて 渡る流れは國府の川 水脈の長さは凡五里

河邊の里の金丸は 神の恵みや引田部の 溢るゝ水の豊にて 河岸の松山程近し 雲の上をば餘所に見て 眞野の入江の夕嵐 咽びて鳴るか濱千鳥 昔を偲ぶ捨子舟 眞野の河邊に消遙て 磯打つ波に車間ひし 順徳院の大御あと 其名もゆかし戀ヶ浦 豊田の沖の碁盤浪 越の長濱眺め來て 蝦夷穴蝦夷塚背合の 法名院の塚や見ん 水澤の瀧は西三川 鶴懸の松の生繁る 高崎辨天岩の景 別れて小比叡蓮華峰寺 國の咽喉南端の 洞で持つ繁地小木港 究出す岬は城山ぞ 昨日の浦や安隆寺 (羽茂線)  
越の菅原打越にて 羽茂本郷の天満社 五百羅漢の大連や 尋ねて淋し城の趾 萩や尾花や盛りなる 草苺の里の鄙童 新倉村の弘仁幸 望めば飯岡妹背山 千舟百舟入り通ふ 越路の渡り赤泊 冷泉院の假の寓 過ぐれば吉向大目宮 (御陵線)  
哀をとむる眞野の宮 義臣の魂もくもる也 こゝにも院御手植の 石抱梅が香ばしき 桔梗ヶ原の御舟石 御馬の石や狎の石 御料の山に程近く 聳ゆる經塚清淨地

友林蘇岐

手綱の蛇や鐘淵 鶯歌ふ阿佛坊 資朝公の御墓石 阿新九の隠れ松 櫻の名所世尊寺や 三宮の御墓千歳宮 廻り終らば後山 御食の神に詣てなん 曰朗慈ひし本光寺 幸崎松を見てゆかん 一の宮をあとにして 鍋倉瀧は大久保に 河内河畔の飯持社 夢想國師の安國寺 越敷の宮の猿八や 青柳系引く機川 波のあやをる岸紅葉 熊野神の隈もなく 下畑村を守ります 名残りの露の畑野郷 萱咲きうふ安壽塚 長谷は觀音仁王門 憲慶法師の墳もあり 小佐渡に高き東境山 月の鞍掛小倉里 映りて清き千枚田 物部神社や御梅堂 神さび立てる加茂林 城ヶ平や栗の江の 遊びの園に杖曳きて 行けば塚原根本寺 大野の里の寺々や 清水の堂の觀世音 素陳は懸る臼ヶ瀧 新穂嶺山望あり 山王の森の奥暗く 長畝里の氣比の宮 城あと残る二方瀧 廻れば瓜牛屋善光寺 鐵泉いづる湯の澤は 湖鏡の庵に程近く 鳥崎松を眺むれば 右に小高き天王臺 吾瀧に入れば梅ヶ澤 原黒畑の権崎の 葦邊の松は年古りて 猶色かへぬ目出たき (皆川線)

千町田つゞく國中の 平野に立る治水の碑 名古の繼橋つぎて來て くまの秋の月や見ん (内海府廻り)  
五月雨山の羽黒杉 梅津の城趾苔の梅 椿の濱に利濟庵 洗足岩は北五十里 白瀬嶺山金剛山 内浦過ぎて大山の 鬼の面鼻恐々に 黒姫越を越え行けば 海にたきつや大晒 難所の橋掛危くも 地にり虫崎海邊の 辨天岩の松の景 鷲崎港の水深く にし出す矢崎彈岬 砲臺望樓あとばかり 眞珠の藻浦や海驢嶋 (外海府廻り)  
二つの龜は願村 賽の河原に佛石 牧場は廣し大野瓶 夏は涼しき扇岩 眞更川なる梵寫池 光明佛や佛法僧 鷹し巢のくく岩谷口 刎坂嶮し大岩洞 禪棚岩は寒戸崎 關の坂なる木の葉石 矢柄の懸橋早すぎて 行けば程なし大幡社 大倉走り走り行き 石名の里に清水寺 捕特山は奥の院 立島嶺山影の神 石花の城趾吊ひて 鹿の浦波の音凄く 南片邊の異人塚 四十二曲險難所 其の化石は平根岬 戸中の洞屋瀟佛野 塗笠山の狐つ峰 昔語りの臺場跡 大浦村の名物は 靜の澗に取る海の魚 高瀬の海の白嶋や 橘濱の定福寺 二見ヶ浦の夕日影 たつればはて辨天の

松の梢にかゝる月 眺めは傳かぬ風情哉 (三崎廻り)  
白木の海の神子の岩 望樓跡の澤崎や 地獄の谷に雲を呼び 鷹の巢行かば深浦が 三岬の道場宿根本の 岩屋中なる觀音堂 松風誘ふ琴の浦 虫屋に左八の岩 箭嶋經嶋風清く 瓜を浮ふる井の尻や 雲井の花の香に匂ふ 御所の櫻の海潮寺 (前濱廻り)  
海底電信設置地の 眞浦の里の法華堂 城ヶ鼻なる春日宮 参りて行かん多田港 丸山村の毘沙門や 女神男神の二つ峰 塚田に老々無名樹の 謂きかまし松ヶ崎 御禪空洞の奥深く 松前明神尊としな 曰連上人着岸の 面影残る本行寺 戸倉トネル打過ぎて 赤玉石や養老瀧 野浦の大膳屋敷跡 帆掛に風嶋明龜岩 (東濱廻り)  
海神棲みし龍王岩 燈崎燈臺大川の 七里の穴や寄崎の 津神の風々宇賀塚山 米山薬師清香園 住吉濱に水浴びん 棚は朽ちたり城の腰 久知の八幡長安寺 嶋の林樹界 種子島にて團原咲也 九州の南端佐多の岬から南十里の沖合に位 する種子嶋は木曾の中央からすると緯度と 四度から遠ふ長さ十五里中三里内外の細長 い嶋で最高地でも千尺に充たない丘陵嶋で 直接暖流の影響を受けるから年平均同温線



# 友林蘇岐

も五度から高い所にある暖帯の範圍ではあるが熱帯産の植物を交へ一般に熱帯的の性状を呈し海岸であるから乾生植物の植物が多い而して種々な熱帯並に温帯植物の天牛及栽培の南北兩限界をなして居る事は植物學上將又農林業上興味ある事實である地層は第三紀層で岩種は砂岩及粘板岩である海岸には珊瑚礁の隆起が多い地勢一般に底平肥沃で開いて田畑とならない所は極く少ない鐵砲の傳來で世に知られたが薩摩芋の傳來を知られなかつた此嶋は移住開拓が等閑視され現在三百の人口と一百餘町の耕地を有するに過ぎない一月平均二町内外の耕作をする事になるから原始的な極粗放な農業をやつて居るので残り數百町歩は原野及山林で移住開拓を歓迎して居る譯である農産物として甘蔗甘藷稻粟黍落花生蕎麥あり畜産としては牛を最良とし豚馬あり養蠶は最も有利なる産業として無限に擴張する事を得可く年七八回飼育し得る事阻害全くなき事とは大に他と競争の望ありと稱せられて居る

遮莫吾人の研究範圍なる森林の現狀は半原生林的大雜木林で二百有餘種の樹木樹類を混生し從來推栽栽培及下駄材等に利用されし外未だ他に利用する事少なく皮肉の嘆に堪へない様である事は本月より林友誌上を借り之等の林樹を紹介し諸君の是正に研究とを乞ふ次第である甘蔗と材蠶は半準備しあり續々製作中に付御要求次第送料は常方持ちにて寄贈する覺悟であるから御要求を願つて置く

雪にも氷にも縁のない種子島でも冬は相當に寒い雨の霽れる時に強烈な西北風がやつて来る、こいつが三四日に一日宛あつて之が三冬中持續する此間歌的の風は誠に冷く寒い取りもなをさすか本嶋の冬で残る三

日が雨と上天氣で足袋と羽織が夫れ程必要でない三月に入ると此循環がくれて来て一週乃至二週に亘る降雨がある嶋人は之を木の芽流しと言ふ丁度木の芽の萌立初むる時だからだ梅はさうの昔に散つてもう若い實が認められる今が櫻の最盛りで山茶は尙咲きつづけて居るけれど茶梅は梅同様とうに散つてしまつた嶋の山野には此茶梅櫻山茶の天生が甚だ多く晩冬早春の裝飾である樹木及挿木は此木のの芽流し前又は中にやつても温帯産の樹木殊に杉や扁柏は未だ冬の紅葉がさめぬ併し根はごんごん出して居る而して温帯に於ける紅葉の美と落葉の景色とは當地にては今見る事が出来る畦畔路傍河岸を飾るは黄櫨と梓の紅葉で光輝ある若々しい生き生きとした美観である

三月五日には生徒一同促して植樹實習をやつた爛漫と咲き盛る花の下に山嶽を振り上げるのは頗る粹な林業で三村學士の云ふ紅葉の中に推茸木を伐採する斧で好一對である櫻は特に地拵の時に一花咲かせてと残して置いたのである休みの時は例の薩摩芋も小高に積み茶をすゝり萬歳快哉を叫んで實習兼帯の花見をする歸りには退屈であつて出来ぬ丈の花を折らせ土産に持たしてやる様な譯で將來市民の道林はかゝる時に實行したいと思ふ少し時季は晚いけれども杉扁柏は中旬から開花して来る所謂黄金雨にあひる時で一陣の疾風と共にあちらこちらに黄金の花畑の立つも又捨でられ風情だ併し困つた事には近來盛に栽培した杉楡に早年から看花結實して生長を害する損で之につき石川の寺尾君から屋久嶋産の杉に付き紹介があつた我輩又數年來の憑業であるが怠漫粗末な數字的に解説を試みるざるを憾む將來屋久嶋産杉本嶋從來の模倣及近

來仕立つる吉野紀州産杉に付比較研究を遂げ兄弟等が噴飯の料に供せん考へてあるどうか兄弟等の實験及意見を示せん事を切望する庭園は桃ぼけ李こでまよりはなすたうもくれん等の盛りで牡丹芍薬も蕾んだつゝじ類は庭園の外さくらつゝじと稱する常緑の小喬木が溪谷に天生して居る大なるものは徑一尺長さ四五間もあり普通徑四五寸で高さ三四間である本島が天生の北限界だううだ蓋しつゝじ類中最大なものであろう本島の中旬から下旬に亘つて白色微紅の天花を開く嶋人は河櫻と言ふ床植旋盤工として甚だ宜しからうと思ふ

山中で現時開花して居るものはたぶろきひさかきはまひさかきあをもひさかき等であをもとは葉に先き立ち冬中蕾んで今黄白色の花を満開し道路の裝飾である此木くろもじに似て悪息あり薪材として克くもゆる故に火の用心の名あり付は本島に最も多く梓と共に紅葉賞す可く材は從來薪炭材の外下駄の齒及板材梁材として利用したが近來裝飾材として聲價を高めて來た様で大に保護撫育を必要とするやうになつた

玆に林中に生ずる草でながばのさつまいなもりうと言ふものがある秋の末から本月初にかけて蔭濕なる溪谷に純白な總狀花咲き亂れる島の雪は實に此の草である

もくれいし、はまびは、ふかのき、やつてなはしろくみ、しまいすせんりやう、はもろ果實になつて居るもくれいしは衛矛科の小灌木で暖地特有の林木で五六月果實が非常に美しはまびは樟科の小喬木で葉批把に類し河岸に天生多く秋末開花して四五月實が熟する防風防潮樹として大切な林木である

ふかのきは茄科の林木で矢張本嶋が天生の北限界地だううごんせつに似た常緑喬木で

# 友林蘇岐

林中に混生し若い木は年中生育を留めない様である材質輕軟で色白く本島では下駄材として利用し重用な林産物として燐寸の軸木にも出來たをうである薪炭材としては最下等である造林學各論に増訂を要講する譯だ從來天然生を利用したに過ぎぬが將來之が保護繁殖の價値があらふと思ふ此島の又冬季に於ける牛の飼料として枝葉が費用されるやつでも矢張牛の飼料なる

なはしろくみは十二月開花して二月から今月にかけて熱帯道山路山野を錦に飾るなつぐみの如く甘いしまいすせんりやうはいづせんりやうに似た蔓狀の常緑小灌木で果實の熟すると共に開花を初め實も花も一所にある暖地植物の特徴として面白き現象でたいみんたちばなの如きくろきの類ももうである今一つ暖地植物の特徴は花實相接ぐ事て甘蔗やこぶじうつぎに見られる

寒い地方で同様蓬蓬せんまい等の天然蔬菜が供給されるがふきはなくてつはふきが多いふきと克く似て居るが葉が厚く褐毛を有し灰汁が強い海岸性暖地性を有して居る此種類で先年當地に於て發見發表されたかんづはふきは深谷の林中に天生し矮生で葉心臟形をなし四季常緑である近時園藝植物として流行するやうである

槐の芽は國の方でも食ふが當地ではくさざの芽を汁や煮べにして食ふ

野邊の草花には特別なものはまだ出ないげんげすみ、れたんぼ、みやこ、さ、だいでいんらう、さじむしろ、かたばみ等の色彩で田圃は今や薔薇の花咲り眼望一里黄金世界の現出で花の香に酔ふ心地は皆はらみを破つて來た蔬菜類の床槽が始まり追々蠶の掃き立て時になるから蠶具の準備等に忙し忙しいと云つても嶋は氣樂である春蠶を

育ひ上げ悠々田畑にとりかゝる之がすんで秋露の二三度も飼ふ米をどつて砂糖を製し植樹をやること云ふ順序で暖くなつたからと寒い所の様に車輪になつて働くにも及ばない

三四月ば干満の差著しく氣候もよいのて干汐狩りの好季節だ白い手拭の姉さん被りが彼所此處の岩類漸の上に見へる遠く望む大隅半嶋開闢の薩摩富士近く屋久の絶峰海岸より直立六千尺峯には尙白妙の雪を載せて英姿雄裝實に南海の重鎮である汽船の定期が二日乃至三日に一回宛ある漁船帆船の出入はたへすきれない之が海と入嶋と内地との連鎖で經濟的に考へても精神的に考へても其頻繁を望む次第である

つまらぬ事を澤山書いた天下一の難文字先生だ解るか知らんか嶋の三月は之丈にし誤つてでも揚載してくれたら又四月に出す

富士西麓より 香氣生

香氣は今岐蘇校友第二十七號を郵便脚夫から受取つたうれと全時に表題木曾山林學校と云ふ灰色の表紙に扁柏の香薫を持つた一雜誌を手にした

自分の胸中が何にとはにしに震えた

香氣は木曾に御世話になつて居つたからと現在の境遇とを對照したからだ然し胸奥には嬉しい心持が残た香氣は學校に居つた頃割合に社會が小さく自分が大きく見えたりと反對に學校をビリで社會へトビダしたら社會が大きくて自分が小さくなつた聖書に智者安くにある學者安くに在ること世の論者いづくにある神は此世の智慧をして愚ならしむるに非ずやとの聲を聞く時香氣は益々小さくなつて行く様だ

手近な例だが山梨縣林業技手と云ふ肩書の同窓の林二君と矢嶋駒二君と僕の三君見

た處ではエラソーナが高い所から見ると炭焼の男がマダ〜ヨツボド社會を大きく見暮して居る

高い山から谷ご見れば瓜やなすびの花盛り

炭焼の小供が鼻を垂してうたふのを聞くと僕よりも香氣だと思ふ

岐蘇林友は自由に開放されてあるが今少しブラズに校友諸兄が投稿せられてほしい香氣は校友諸兄にして通信を望まれば何時でも應じます

福嶋通信

見渡す限り白雪皚々たりし福嶋の町も春の恵に濡れて昨今は金比羅山の櫻花も綻るばかりと相成り關山公園に或は小丸山に散歩の杖を曳くもの日に増し相加はり候玆に二月雪の爲めに閉ぢ込められたる吾等も何となく世の中に出でたる如き心地致し放課後には皆外出し寄宿舎はスツカラカンの有様に有之是より愈々福島獨特の時節と相成る可く候鐵道開通以來福島町は漸く發展の緒につき家屋増加し街頭稍々整頓に向ひ居り候處本月六日圖らずも祝融の災に罹り町の目貫八十有七は鳥有に歸し當町に一大頓挫を來し甲候今玆に火災の状況を畧記すれば當日午後二時半清水町岩屋旅館裏手附近より出火し折柄吹捲く西風に煽られて火は見る見る西方に延焼し火勢頗る猛烈となりて消防の功果國に見えず一時は本町上町をなめ盡し續ては向城にも延焼せん虞之有候處消防の盡力によりて午後五時半東は木曾銀行及町役場にて西は清水町中津屋南は横町にて漸く消し止め申候

本校生徒も時を移さず總出となりて消火に盡力し至る處木校生徒の有らざるなく大に奮闘したるは衆人の認むる處と相成り申候







北 佐 久  
西 筑 摩 唐 澤 俊 文  
西 筑 摩 平 田 實  
西 筑 摩 三 石 新 一 郎  
西 筑 摩 肥 田 儀 兵 衛

○入學式。四月十五日午前九時講堂に於て右記五十五名に對する入學式舉行 校長先づ教育勅語を捧讀し終て新入生に對する希望及訓示あり次に在校生總代坂田勘太郎迎辭を朗讀す之に對して新入生總代田近善右衛門宣誓の辭を朗唱して式を閉ぢぬ

○体格検査 入學式を終るや直ちに新舊生徒の体格検査を執行せり

○役員任命 豫て校友會に於て推選せし校友會役員は校長の詮衡を経て愈々左の如く發表せられたり

矯風委員六名

- 坂田勘太郎  
樋口徳一  
家高甚一  
細江七兵衛  
久保田吾良  
鈴木福重
- 研究部長  
坂田勘太郎
- 全 副部長  
久保田五良
- 庶務部長  
樋口徳一
- 全 副部長  
家高甚一
- 庭球部長  
吉池三九郎

- 全 副部長 代田文之助
- 擊劍部長 細江七兵衛
- 全 副部長 喜多村 明
- 遠足部長 神作 四郎
- 全 副部長 代田文之助
- 弓術部長 下 枝 壽 一
- 全 副部長 鈴木福重
- 三年級長 坂田勘太郎
- 副 久保田吾良
- 二年級長 關 翠 義
- 副 後 藤 貫 一

○級任命 各學年級長左の通り任命 但し一年級は假りに田近善右衛門任せらる

明治四十四年度校友會費收支計算報告  
金三百四拾七圓四拾壹錢壹厘 總收入高  
金參百貳拾圓五拾七錢五厘 總支出高  
差引貳拾四圓八拾參錢六厘翌年度へ繰越す

内 譯  
収入之部

金拾圓貳拾參錢五厘 四十三年度より繰越

金貳百八拾七圓八拾錢 在校職員及生徒の校友會費徴収高

金四拾貳圓四拾參錢六厘卒業生より會費徴収高

金六圓參拾貳錢繪葉書拂下代

金六拾貳錢預金利子

計金參百四拾七圓四拾壹錢壹厘

支 出 之 部

金百貳拾七圓七拾錢也雜誌發行費

金參拾七圓拾五錢五厘庭球部質

金拾六圓六錢弓術部費

金拾貳圓五拾壹錢擊劍部費

金六圓四十八錢擊劍部選手補助費

金參拾六圓四十貳錢例會及び臨時會費

金貳圓七十錢運動會の補助費

金參拾圓參拾五錢五厘通信費

金四拾圓貳十參錢五厘雜費

計金參百貳拾貳圓五拾七錢五厘也

